

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 8 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02624

研究課題名（和文）論理教育におけるレトリックの評価に関する研究

研究課題名（英文）Research on the evaluation of rhetoric in logic education

研究代表者

難波 博孝（NAMBA, HIROTAKA）

広島大学・人間社会科学研究科（教）・教授

研究者番号：30244536

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究期間において、記述問題に対する調査対象者の回答を分析し、研究分担者でその評価を行っていった。その結果、論述の回答の評価には、様々なカテゴリーの要因が複雑に重なることがわかった。研究分担者どうしの回答評価には共通性もあれば相違もあったが、それは、各評価者が持つ、論理についての信念カテゴリーの組み合わせ・重み付けの違いであることがわかった。しかし、どのような重み付けが妥当であるかについては、共通の一致を見ることができなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義としては、論理とはなにか、論理教育で育てる教育内容とはなにかについては、研究者間に複数の信念カテゴリーで分けられる要素をどう所持しているかで多様になることが分かった。研究者が増えれば増えるほど共通信念カテゴリーは減少し、共認可能性が低下することもわかった。論理教育を研究・実践を行う際は、関係者の保有する論理に関わる信念カテゴリーをオープンにしどの部分について協働するか取り決めることが重要である示唆が得られた。社会的意義としては、高等学校検定国語科教科書（第一学習社版）に本研究の成果を反映した教材を作成することができたことである。

研究成果の概要（英文）：During this research period, the responses of the survey participants to the essay questions were analysed and evaluated by the co-researchers. The results showed that the evaluation of the essay responses was a complex combination of factors from different categories. We found that the similarities and differences in the evaluations of the responses of the co-researchers were due to differences in the combination and weighting of the belief categories about logic held by each evaluator. However, there was no common agreement as to what weighting was appropriate.

研究分野：国語教育

キーワード：論理 国語教育 カテゴリー

1. 研究開始当初の背景

私達は、論理教育のカリキュラムを開発することを目的として、国語科の教育内容としての論理・論証モデルの検討や論理的文章教材の系統性の検討、批判的読解モデルの検討などに取り組んできた。また、科学研究費補助金(基盤研究C)(平成26~28年度)(以後予備研究と呼ぶ)においては、量的な調査によって、小・中・高等学校の学習者の論理的認識力の育成に課題があることを明らかにした。

予備研究における調査では、学習者に対して自由式記述を求める読解問題を課した。その回答の分析に際して、文章の読み手の感情に強く訴えかけようとする熱意が感じられる記述を分析者は高く評価する傾向にあった。そこで、学習者の記述を再度分析したところ、高く論理評価された記述は、そうでない記述と比べて、有意に文字量が多いということが明らかになった。

論理の認識の分野では、発話の分量を増やすことによって説得力が高まるということが知られている。このことを踏まえると、学習者の論理的認識力の表出を教師や研究者や研究者が論理評価するにあたって、記述の論理の認識が影響を与えているのではないかと推測できる。

論理教育において論理の認識を教育内容として位置づけることが提言されたことはあったが、論理教育における教師や研究者の論理の認識の影響を分析した研究はこれまでにない。学習者の学びを評価するためには、教師や研究者の論理の認識の影響を明らかにする必要があると考えられる。

そこで、リサーチクエスチョンを、学習者の論理を、教師や研究者はどのように評価しそこにはどのような論理の認識があるか、とした。

2. 研究の目的

本研究は、論理教育における論理の認識の位置づけを明らかにしようとするものである。そのために、学習者の表現上の論理の認識が教師や研究者の論理評価に与える影響を明らかにすることが本研究の目的である。

本研究により、国語科において育成を目指すべき資質・能力である創造的・論理的思考力を育成するための論理教育における論理の認識の指導モデルが開発されることが予想される。教師や研究者が学習者の論理的表現を論理評価する際に、学習者の表現上の論理の認識の影響がどのように影響するかを明らかにすることにより、試験における学習者の学力の測定の信頼性を高めることが期待できる。

大学入学者選抜改革の一環として、大学入試センター試験の後継としての「大学入学共通テスト(仮称)」が創設されることとなった。この新テストにおいては記述式の問題も導入される。採点の質や公平性の担保が課題とされる中で、論理の認識が採点者に与える影響を明らかにすることも視野に入れた本研究の意義は極めて大きいと考えられる。

3. 研究の方法

本研究は、論理教育における学習者の表現に対する教師や研究者の論理評価において、学習者の表現上の論理の認識が与える影響を明らかにするとともに、論理教育における論理の認識の指導法を開発することを目的とする。そのために、3年間で次の研究を行う。

学習者の記述表現における論理の認識が教師や研究者の論理評価に与える影響を明らかにする。

論理の認識と論理的認識力との関連を明らかにする。

論理教育において論理の認識を学習するための教材を開発する。

論理の認識に焦点を当てた論理的認識力の育成方法を開発する。

4. 研究成果

(研究の直接的成果)

本研究期間において、記述問題に対する調査対象者の回答を分析し、共同研究者でその論理評価を行っていった。その結果、論述の回答の論理評価には、様々なカテゴリーの要因が複雑に重なることがわかった。共同研究者どうしの回答の評価には共通性もあれば相違もあったが、それは、各論理評価者が持つ、論理についての信念カテゴリーの組み合わせ・重み付けの違いであることがわかった。しかし、どのような重み付けが妥当であるかについては、共通の完全な一致を見ることができなかった。そのことは、論理の捉え方や論理教育の捉え方がいまだに一致していないことにつながることを考えられる。

カテゴリーは以下の通り。

A-1 「読者」というものを意識している点を論理評価

A-2 「読者」として自分自身を位置づけ、実感的に捉えている点を論理評価

A-3 「読者」の姿を客観的に意識している点を論理評価

A-4 「読者」として自分自身を位置づけ、実感的に捉えると同時に、それを客観的に捉えている点を論理評価

B-1 「筆者」を指定している点を論理評価

B-2 「筆者」の思い・意図を客観的に捉えようとしている点を論理評価

B-3 「筆者」から「読者」への働きかけを意識している点を論理評価

B-4 一般的な記述ではなく、他ならぬこの「筆者」の思いを実感的に捉えている点を論理評価

B-5 単に「筆者」の主観を書きただけならば論理評価しない

C-1 重要な内容に着目している点を論理評価

D-1 自分なりの解釈を述べている点を論理評価

D-2 実感的に捉えようとする姿勢を論理評価

D-3 問いに答えようとする意欲がある点を論理評価

E-1 内容に触れた点を論理評価

E-2 回答の文量が多い点を論理評価

E-3 回答の文量が多いかどうかは論理評価しない

- E-4 回答が問いと対応している点を論理評価
- E-5 回答が日本語として適切である点を論理評価
- E-6 回答が日本語として適切であるかどうかは論理評価しない
- E-7 回答に根拠が付されている点を論理評価
- E-8 回答に妥当な根拠が付されている点を論理評価
- E-9 定型句は論理評価しない
- E-10 回答の記述が具体的で、わかりやすい点を論理評価
- E-11 「ある」場合と「ない」場合が対比的に述べられている点を論理評価

(研究の学術的意義)

研究成果の学術的意義としては、論理とはなにか、論理教育で育てる教育内容とはなにかについては、研究者間に複数の信念カテゴリーで分けられる要素をどう所持しているかで多様になることが分かった。研究者が増えれば増えるほど共通信念カテゴリーは減少し、共訳可能性が低下することもわかった。

論理教育を研究・実践を行う際は、関係者の保有する論理に関わる信念カテゴリーをオープンにしどの部分について協働するか取り決めることが重要である示唆が得られた。

本研究の大きな社会的意義としては、本研究の大部分の参加者が編修著作者として参加している、高等学校検定国語科教科書(第一学習社版 「現代の国語」「論理国語」)に、本研究の成果を反映した教材を作成することができたことである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 青山之典	4. 巻 11
2. 論文標題 説明的文章の難易度を定める要因(4) 高等学校国語総合の教材文に焦点をあてて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻年報	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 幸坂健太郎・難波健悟	4. 巻 59
2. 論文標題 論説・評論の読みで学習者が説得の 相手になる 指導 「マルジャーナの知恵」(岩井克人)を教材とした実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 語学文学	6. 最初と最後の頁 45-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 吉川芳則	4. 巻 37
2. 論文標題 説明的文章の批判的読みの学習指導過程構築の観点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語表現研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 篠崎祐介・青木幹昌	4. 巻 19(1)
2. 論文標題 『学び合い』授業における教室談話に関する事例研究 説明的文章の協同的読解場面に焦点を当てて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 55 - 62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 幸坂 健太郎	4. 巻 61-2
2. 論文標題 論説・評論を「自分と結びつける」こと概念区分 高校生を対象としたインタビューの分析に基づいて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 読書科学	6. 最初と最後の頁 77-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 本渡葵	4. 巻 40
2. 論文標題 Keganの理論を教育から捉える - 「子どもの教育」へひらくための試論 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新見公立大学紀要	6. 最初と最後の頁 147-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川芳則	4. 巻 35
2. 論文標題 説明的文章の批判的読みの授業づくりの要諦	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語表現研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青山之典	4. 巻 9
2. 論文標題 説明的文章の難易度を定める要因(3) - 小学校と中学校の国語教科書を比較して -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 難波博孝	4. 巻 18
2. 論文標題 児童の言語生態研究会（児言態）理論と国語（母語）教育諸理論の統合試論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 児童の言語生態研究	6. 最初と最後の頁 36-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 難波博孝	4. 巻 67（8）
2. 論文標題 「新しい実在論」と第三項理論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 18-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 篠崎祐介・青木幹昌	4. 巻 18(1)
2. 論文標題 書写における低学年児童の相互評価に関する研究 主体的・対話的な学びによる授業実践を通して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 本渡葵
2. 発表標題 国語教育の多層性 : 国語教育研究が視野の外においてきたヒト・コト・モノ「児童心理治療施設併設校での言葉にかかわる教育: A校の事例
3. 学会等名 全国大学国語教育学会 第138回春期大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 篠崎祐介, 青木幹昌
2. 発表標題 国語科の論理的思考力育成における主張の把握の位置づけの検討
3. 学会等名 第137回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 難波博孝, 幸坂健太郎, 本渡葵, 篠崎祐介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 第一学習社	5. 総ページ数 304
3. 書名 高等学校 現代の国語(検定教科書)	

1. 著者名 難波博孝・篠崎祐介・本渡葵	4. 発行年 2021年
2. 出版社 第一学習社	5. 総ページ数 56
3. 書名 論理力ワークネクスト	

1. 著者名 吉川芳則編著・明石市立朝霧小学校著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 128
3. 書名 インタビュー・スピーチ・プレゼン・話し合いの力をつける！小学校国語科話すこと・聞くことの活動アイデア44	

1. 著者名 難波博孝, 幸坂健太郎, 本渡葵, 篠崎祐介	4. 発行年 2019年
2. 出版社 第一学習社	5. 総ページ数 32
3. 書名 1日10分言語カドリル入門「聞く・話す」	

1. 著者名 難波博孝, 幸坂健太郎, 本渡葵, 篠崎祐介	4. 発行年 2019年
2. 出版社 第一学習社	5. 総ページ数 32
3. 書名 1日10分言語カドリル入門「読む」	

1. 著者名 吉川芳則	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 144
3. 書名 国語嫌いな生徒が変わる！中学校国語科つまずき対応の授業&評価プラン	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	青山 之典 (AOYAMA NORIYUKI) (00707945)	福岡教育大学・大学院教育学研究科・教授 (17101)	
研究分担者	宮本 浩治 (MIYAMOTO KOUJI) (30583207)	岡山大学・教育学研究科・准教授 (15301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉川 芳則 (KIKKAWA YOSINORI) (70432581)	兵庫教育大学・学校教育研究科・教授 (14503)	
研究分担者	幸坂 健太郎 (KOUSAKA KENTAROU) (20735253)	北海道教育大学・教育学部・准教授 (10102)	
研究分担者	篠崎 祐介 (SINOZAKI YUUSUKE) (60759992)	玉川大学・文学部・助教 (32639)	
研究分担者	本渡 葵 (HONDO AOI) (20781248)	新見公立大学・健康科学部・講師（移行） (25302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関